

大佛供養物語

大佛供養物語

五祖—善導和尚
を指す

日みす達—誤字
あるか

春乗房重源東大寺やうやく勸めつくりて入唐^{にうたう}す。歸朝のとき極樂の曼陀羅^{まんだら}、五祖の眞影をわたし奉り、東大寺半作の軒^{のき}の下にて、法然聖人御導師^{ほふねんしやうにん}として、供養あるべきよし風聞あり。しかる間建久六年乙巳^{きののふ}十一月廿八日と定めおかれし事なれば、東國大將殿を初めまゐらせて、宗徒^{しゆんた}の大名千葉、北條、畠山、宇都宮を初めとして、大名高家三百八十四人、其外數をしらず。又鎌倉殿の北の御方を初めまゐらせて、畠山の内様^{うちさま}、宇都宮の内方^{うちかた}は鎌倉殿の北の御方には、妹御前^{いもうごぜん}にてましくければ、申すにおよばず、大名小名の女房達、法然聖人の御說法聽聞せんとて、六百人ときこえし。京上藤達^{とうだ}には帝王^{ていおう}を初めまゐらせて、關白殿卿上雲客籠居^{こもり}日みす達を始めまゐらせて、南都^{なんと}へ輿車^{こしぐるま}をやりつどくるぞおびたどしき。其外大和、山城、和泉、河内、近江、越前よりまゐりつどふ聽聞者は、いくらと云ふ數をしらず。かゝる所に法然聖人鎌倉殿へ案内を申されけるは、承り候へば

得業一昔奈良の
寺にありし學位
にて維摩會最勝
會法華會を勤め
たる者をいふ
三臺一みだいに
(御臺)の宛字な
るべし

供養の御導師に源空をめされ候ふべき由候ふ、尤も導師にめされん事面目と存じ候へども、淨土門をとり立てて、愚癡闇鈍の衆生を佛道なさんと營み候へば、山の大衆不思議の法然房、外道の法をとり立てて、衆生を地獄へおとさんとせらるゝ不思議さよとて撰擇の形木をうちわりし刻に、黒谷を退出せられ、當時は大原にすみ候ふ、まして導師つかまつると聞えては、廣座とも憚る事は候はん、狼藉仕り候はん哉、かゝる大事の御供養に障礙をなさん事口惜しかるべき事に候ふ、餘の御導師をめされ候へ、源空におき候うては叶ひ候ふまじきよしを申されければ、鎌倉殿頼朝のはからひたるべからずとて、當帝へ奏問せらる。帝王を初めまるらせて公卿殿上人、さていかどあるべきと詮義したまふ。大宮の左大將忠光の公の申されけるは、白河の院の仰せにも何事も丸が心にそむける事はなけれども、賀茂河の水と雙六のさいと山法師の心、これ三つは丸の心に叶はぬ物ぞと仰せられし事なれば、今もかくこそ候はんすらんめ、さ候はゞ天台座主をめされ候へと申されければ、しかるべしとて、天台座主を召さるべしとぞ聞く。奈良法師此事を承り謂候はず、其義ならば我寺の得業こそ御導師はせらるべけれ、ゆゑいかなとなるに、聖武皇帝の御ちぎり浅からざりし三臺女御に過ぎおくれたてまつり、御歎き深か

りしに、死出の山より郭公かくこうに女御の御歌を誦よみて、娑婆しやばへ言傳ことづられし事ありしぞかし、其歌に云く、

わくらはに問ふ人あらばほととぎす死出の山をばひとりこそ行け

と假名かなに書きて、郭公の足にゆひつけてつかはされければ、卯月八日に内裏の上を鳴きめぐるを、公卿殿上人鞠まりの會くわいありけるが、初音はつねめづらしく聞ゆる物かなと、雲井を御覽すれば、文をくひきつて落したりければ、大臣達不思議と思召し、是をとりて帝王に奏し申しければ、是を開き御覽するに、女御の御手跡にて此歌をよみ給へば、御涙にむせばせ給ひ、あらむざんや御存生ごぞんじやうの時は百官萬乗の位にそなはり、國母女院こくもによういんとかしづかれましましけれども、死出の山をば只ひとり行き給ひけん事よとて、金銅こんどう十六丈の瑠遮那るしゃな佛ぶつを手づからみづから鑄いたてまつり、行基菩薩を御使として、中天竺より婆羅門尊者を請しやうじ渡し奉りて、供養をとけさせ給ひたりし事ぞかし、我寺の本願を思うて得業こそ導師をばせらるべけれど申しければ、寺の僧綱是をきよて、さらば我寺の誦源法印しゆげんほういんこそ顯密の家にてましませば、御導師はせらるべきとぞ申されける。帝王を初めまゐらせて、いづれを導師に定むべきとぞ仰せける。かゝる所に梶原、鎌倉殿の御前に参りて、地體ちたい

顯密一天台華嚴
淨土等の教を顯
教といひ、眞言
を密教と名づく

淡海公―藤原不比等の謚號

相論―爭論の意

御心せばき御事にて御座候ふ、賤しき者さへ富貴ふきの家に生れつれば、堂を作り塔をくみて、二座三座の說法をばせさする事にて候ふ、いはんや大日本一番の大佛の御供養に、一座の御說法はすけなき御事にこそ候はんすれ、只三人ながら召され候へと申しければ、然るべしとて、三座の說法に定まりぬ。又一二番をぞあらそはれける。さてたれか一番の御導師をせらるべきと申されければ、山の大衆我山うへの上をばたが期すべき、座主ざす一番とぞ申しける。又奈良法師の申しけるは、花族くわんぞくをたてんするにたれか山に劣るべき、東大寺は聖武皇帝の御願所、興福寺は淡海公の氏寺なり、花族榮葉くわんぞくえいふ、南都の上をばたがおすべき、得業一番とぞ申しける。又寺の僧綱申しけるは、其義ならば我寺の法印こそ九條殿の御子息に壽樂院の寛明僧正の御弟子也、顯密兼學淨行持律の御事也、法印御導師とこそ申しける。相論さうろんによつていづれを一番に定むべしともおほしめさず。又梶原申しけるは、さらばくじを取らせ候へ、くじの籌はかりこぎはかた恨み候はじとて、三人の御代官をめて、足立あだちの藤九郎くじを持ちてとらす。けに山王權現の御はからひにてや候ひけん、山は一番に取りあたる、南都は二番に取り當る、寺は三番に定まりける。さて法會ほふゑの儀式には山の大衆一千人、奈良法師一千人、寺の僧綱一千人、そうじて三千人は大行道に

伽陀—譯して頌
といふ偈に同じ

いきずみ—思を
凝らし澄ます意
か
四王—持國、廣
目、增長、多聞の
四天王をいふ
八部—天、龍、夜
叉、乾闥婆、修
羅、迦樓羅、緊那
羅、摩睺羅迦を
いふ

六青—綠青の宛
字か

たち、廻る錫杖の役には山より圓入房に定まりぬ。伽陀の役には南都より率の法印但馬
の阿闍梨、戒壇院の大夫房、圓明院の式部の阿闍梨を初めとして、十二人とぞきこえし。
鑊鉢の役には寺より覺乘坊、道永坊、この清僧たち我劣らじといきすみけるは、天人も影
向し、堅牢地神、梵天四王龍神八部も御納受ましますらんとぞおほえける。去程に上臈
達輿車に乗りつれて御聽聞せらる。座主の御說法始まるに、近き遠きのもの一文一句に
ても御聽聞とおほしき事もなかりけり。是を始めとして三座の御說法は過ぎ侍れども、
たが耳に入る御聽聞更になかりけり。鎌倉殿の北の御方、大將殿へ御使をもつて仰せあ
りけるは、東國より佛の御說法聽聞のためにはる／＼上りて候へども、何事の聽聞事も候
はねば、法然聖人の御說法聽聞申して下向し候はでと申させ給ひければ、賴朝もさこそ
存じ候へとて、御使者まゐらせける。聖人も今こそ参り候ふと御返事ある。さるほどに
山の大家是をきよて不思議の法然房の振舞かな、碩學達の御說法ありつる後に、何條の
法をのぶべき、必ず淨土門をほめて餘宗をそしらんとぞ思ふらん、もしさもあらば倚子
より引きおとし、恥をあたへん物をとて、あらしき大衆一二百人、姿をかへて聽聞衆にま
じはる。聖人はをしめされたれども、六青の小袖のさる體なるに薄墨ぞめの衣めし

て、高野^{かうや}日笠を顔にあて、いと事もなけなる體^{てい}にて入堂し給ふ。御供には小坂の善惠坊、長樂寺の隆寛^{いんせつ}引接坊、筑紫の聖光坊を初めとして、御弟子十二人にてぞ侍りける。聖人の倚子^{いす}ちかくつらなり給ふ若殿三人、あないやしけの御房や、輿車^{こしくるま}にてこそまるるべきに、かちやはだしで見苦しさよ、是は本^{もと}よりの貧僧かなんどとさよやき笑ふ。聖人東西をしづかに御覽じて、幾千萬ともなき聽聞衆を、皆死人^{しにん}ぞかしとおほしめし、御涙をながさせ給ひければ、北面の下蔭^{かげ}どものいひけるは、あれ見給へや、說法すべき智分^{ちぶん}が無くてこそ泣き給ふにやと、笑ひあひけり。聖人かね打ち鳴らし、東西をこらんじ、人の身の欲心はおそろしきものにて候ふ、碩學達の御說法のあとで、源空がまゐり候へば、何條の法を説きのぶべき、いかさま施物^{せもつ}にこそ心をかけて参りたるらめと思召^{おもほしめ}し候ふらん、それもつともにて候ふ、又聽聞衆の御耳才學^{くわうさい}宏才博覽^{はくらん}の人あまた御わたり候へば、はづかしき御事にて候へども、一座の說法はつかまつるべく候ふ、定めて山の大衆はいかさまにも淨土門をほめて、餘衆をさらはど恥にあたへんとぞ思しめし候ふらん、八萬四千の法はみな衆生の機根にしたがひて説き置きたまへる法なれば、いづれをそしり、いづれを正しとすべきやらんおほえず候ふ、中にも我身の體^{たい}は妙法蓮華經の五字をも建立^{こんりふ}し給へる事なり、

餘衆―餘宗の行
恥にあたへん―
恥をあたへん―
恥か

胸には八葉の蓮華あり、佛みなこれにましく給へり、かるが故に惡業もとより常にな
 し、妄想轉倒よりおこる、心藏みなきよければ、衆生もとより佛なり、かるが故に法花經を
 そしらん者は、只我身の體をやぶるに似たり。そもく法花經と申すは中天竺のあるじ淨
 飯大王の御子悉達太子、十九歳にて大道心をおこさせ給ひ、御ちぎり深かりし耶修多羅夫
 人をそむき、いとをしみの御子羅睺羅をふりすて、檀特山にいたらせ、阿私仙人につかへ、
 難行六年苦行六年し給ひて、三十成道御ぐし剃除し給ひて、釋尊とあらはれ給ふ、一字
 一點なりとも、この御經をあだに申すべき事なし。されば書寫供養して筒に奉納し侍ら
 んに、口に覆面をして臭き息をあてじと奉納したてまつるべし。かゝる御經をば末代惡世
 の衆生等いかでかよく保ちたてまつらざらん。又眞言の教と申すは、たとへば人となる
 事は父の姪母の姪をもつてなり、いかなれば父母の姪をもつて人と成るべきぞや、北斗
 七星延命經には、九曜七曜の星のあつまりて、作りこしらへる事なれば、大骨、小骨、肉
 肝、目、口、耳、鼻、六根六境佛ならずと云ふ事なし、出入の息は金剛界、胎藏界、動き
 はたらくこと印契ならずと云ふ事なし、就中北斗七星は頂を座とせり、最後臨終の時ま
 でもしれうを定め、常に其人を守護し給ふ。九曜七曜は、酒飯ともなれり、その人をは

三業―身、口、意

善導―唐の高僧
にて淨土教を究
む、法然の教は
此流を繼承す

らんとする時、北斗さきだち座をはなれ出で給ふ、玉のいづるを人光物ひかりものの出づると申す事にて候ふ、かゝるめでたき法も七年の兼行けんぎやう五年三年して、いかに悟さとるといへども、百日の精進しやうじん潔齋けつさいにてこそ、傳法灌頂はつかまつり候へ、かくの如く候ふ間、下界の衆生この法をいかでかたもち候ふべき。又座禪修行と申すは、達磨いにしへの智人達ち にんたち、樹下石上じゆけせきじやうにこもり、岩の上を座と定め、膝をくみ手をむすびて、三業をしづめ身をはたらかさず、七年五年三年通とほして得法仕り候へども、末世の衆生は風の梢を鳴らすごとく、海の波の荒れたるごとく、散亂疎動さんらんそどうの心なれば、いかでかたすやくかゝる座禪をば仕るべき、此ことわりを存知し給ひて、釋尊世に出でさせ給ひ、すでに八萬四千の教法を説き給ふ、中にも大無量壽經に云ふ、末法萬年餘經悉滅彌陀一教利物遍増と説きたまへり。此經を善導釋してのたまはく、萬年三寶滅めつ此經住めつしやうぢやう百年爾時間ねんにしもん一念皆當德生彼ねんかいたうとくしやうひと説きたまへり。かゝる御事にて候へば、源空淨土門を取り立て候へば、外道けだうの法をとりたてて、衆生を地獄へおとさんと仕るとあつて、山中を追ひいだされて候へば、いかでか聖教しやうけうの所判のまこと尊たつぎき處を背くべき、三世さんぜの諸佛は十萬佛土を建立して、衆生をみちびかんと誓ひましませども、餘佛は顯密兼學淨行持律のものをこそ迎へんとは誓ひましませ、西方

五劫思惟の間—
阿彌陀佛が未だ
佛となり給はざ
る時長大時限の
間思惟分別をこ
らし給ひしをい
ふ

毘闍—冠猛風と
譯す

極樂の阿彌陀佛は十惡五逆の衆生永く三途にしづみて浮ぶまじきかとなけかせ給ひ、五劫思惟の間結跏趺座し給ひて、四十八願をおこさせ給ひ、第十八の願に六字の名號を造らせたまひ、乃至十念の願をおこしたまへり。そもく五劫思惟と申すは、一切の深き事高き八十里の磐石を天人のあまの羽衣をきて、三年に一度あまくだらせ給ひて、此岩を撫でてはのほりく、皆なでつくすを一劫と申す也、又八十里の箱に芥子といふ物の菜種よりも小きを、此箱に滿ちたらんを、天人三年に一度下りて、一つづつ取りつくせるを一劫と申す也、如此方八十里の岩をなでつくし、八十里の箱の芥子を取りつくすことを、五劫思惟とは申す事にて候ふ、是ほど久しく案じまします功能いかほどとか思召し給ふ、念佛をば立つ子這ふ子をさなき者まで、南無阿彌陀佛と申すはやすき事にて候へども、佛の兆載永劫の間衆生を佛になさんとして、案じましけるあり難さよとて、南無阿彌陀佛と申すこそ八十億劫の罪の重罪消滅するところ候へ、中にも一念十念の功能のふかき事、喩をとつて申さんに、高堅樹と云ふ木はおひのほること一日に百丈づゝ、百年おひのほる、此木の高さに金銀七寶の塔をくみたらんと、一念の功能と對し候へば、高堅樹の高さの七寶の塔の功德は十分の一も念佛一念に及ぶべからずと見えて候ふ。又毘闍風といふ風は大力の

者箭を射出したらんが如く、東西南北をめぐり、おこたらす百千年吹きゆきたらん遠さの間に、金銀七寶の堂塔をひとしく造りたらんと、一念の功德と對すれば、毘闍風の吹きゆきたらん跡の堂塔は、十分一も一念の功德によりつくべからずと見えて候ふ。さて一念の功德は天竺に洹河と云ふ河あり、無熱池の池より流れたる河也、廣さ四十里、深さ四十里あり、水上より湊まで百萬三千六百里流れたる河なり、此河のいさごの數の金銀七寶の堂塔を造立したらん功德とくらぶれば、かの洹河の沙の數の堂塔は、千分の一も一念の功德には及ぶべからずとこそ見えて候へ、又一大三千世界の草木をあつめて灰にやきて、是は其山の木の灰、かれは草の灰と佛はしろしめせども、一念十念の功德とは説きつくしがたしと佛は説きたまふ、中にも此法は女人のためにおこし給ひたる願にて候ふ、三業をしづめて耳をそばだて御聞召し候へ、女人は三世の諸佛に棄てられて、佛と成るべきことなし、吾朝は小國たりといへども、女人のまるらぬ所おほく候ふ、吉野の奥には不動院、比叡山には坂本をかぎる、高野山には不動坂、天王寺には寶塔、善光寺には堂の内へはまるれども、御格子の内へはまるらず候ふ、あさましと云ふばかりなし。されば涅槃經には女人地獄使永斷佛種子外面似菩薩內心如夜叉とのたまへり、此文の心は

女人は地獄の使永く佛子の種たねをたつ、外面は菩薩に似たりと云へども、内心は夜叉のごとし、同じき經の二十一卷にのたまはく、諸しやう有三千界男子諸煩惱合集以一人女人爲業障ごうしやうとのたまへり、此文の心はあらゆる三千世界の男子のよろゝの煩惱を合せ集めてもつて、女人一人の業障とすとのたまへり、同じき經の二十三卷に、女人大魔王能食一切人現世作纏縛きんげんせ後生爲怨敵ごんてきとのたまふ、此文の心は女人は大魔なり、よく一切の人をくらふ、現世には纏縛おんまなことなり、後には怨敵ごんてきとなるとのたまへり、心地觀經の文一の卷四丁めにとき給ふ、三世諸佛眼墮落於大地法界諸女人永無成佛願とのべ給へり、此文の心は、三世の諸佛の御眼は大地に墮落すと云へども、法界の女人ながく成佛の願ぐわんなし、又阿闍經あしやくきやうの一の卷二十一丁にのたまはく、一見於女人永結三途業、何況於一犯定墮無間獄とのたまへり、此文の心は一度女人を見れば、長く三途の業をうく、いかにいはんや一度をかしぬれば、定めて無間獄におつと云へり、法華經の五の卷にも一者不得作梵天王、二者帝釋、三者魔王、四者轉輪聖王、五者佛身とのたまへり、此文の心は女人一には梵天王となる事をえず、二には帝釋とならず、三には魔王とならず、四には轉輪聖王とならず、五には佛身とならずとのたまへり。されば女人は三世の諸佛に捨てられたり、女

人の頂いたゞきに鼎かなへあり、肩かたに火毒くわどくのほむらあり、腹はらに劔けんほくのつるぎの山あり、かくのごとくの不淨惡業ふじやうあくごうのとがを心中しやうしゆにつゝめるによつて、女人にょなんをば深く忌まれけるものと説きたまへり、されば女體にょたいの御門みかどは此涅槃經しねはんきやうを御覽みかんじて不當ふたうの佛ぶつの仰おほしせかな、さながら女人にょなんの惡名あくみやうをたて給ふ事の口惜くちやくしさよとて、涅槃經ねはんきやう四十卷しじふくわんをみな燒やきはらせ給ひたりしを、御子みこの徳とく一大師いちだいし碩學しやくがくにてわたらせ給ひしかば、空そらに覺さえて書き留さめ、日本國にっぽんこくにひろめ給ひし御事ごじ也、女人にょなんの業障ごうしやうの深ふかき事かくのごとし、淺あましきことかぎり無しといへども、阿彌陀あみだ如來にょらい廣大無邊くわんだいむへんの御慈悲ごひしにて、四十八願しじふはちがんの中に第三十五の願がんにのたまはく、設せつ我得佛えがくぶつじつほうじりやうふかしざしよづせかいこうによにんちんがみやうがくわんきしんらくほつぽだいしんえんあくによしんじゆしゆしによるによる十方無量不可思議諸佛世界じふほうむりやうふかしざしよづせかいこう其有女人にょなん聞我名號きわがなごう觀喜信樂發菩提心くわんぎしんらくはつぼだいしん厭惡女身えんおにょみん壽終之後復爲女じゆしゆのちのちふたふた像不取正覺ざうふしゆしやうがくと説きたまへり、此願このがんの心は、たとへわれ佛ぶつをえたらんに、十方無量の不可思議諸佛じふほうむりやうふかしざしよづせかいこうの世界このせかいに、それ女人にょなんありて我名號わがなごうをきよて喜びたのしみ、菩提心ぼだいしんをおこして女身にょみんをいとひにくまんに、命終いのちしゆりて後、又女像にょざうとならば正覺しやうがくをとらじと誓ちかひ給へり、まさ
知るべし、又女人にょなん成佛ぶつの願成就がんじゆじゆの文ぶんに云く、すなはち彌陀みだの本願力ほんがんりきによるがゆゑに女人佛にょなんぶつの名號なごうを稱なづして、まさしく命終いのちしゆの時、女身にょみんを轉まじて男子なんしとなる事をえて、彌陀みだの御手みでをさづけ菩薩身ぼさうしんをたすけ、法華ほふけの上うへにまします佛ぶつにしたがひて、往生おうじやうして佛ぶつの大會たいゑに

無生忍——無生無
滅の眞理を認知
すること

入りて、無生忍むじやうにんを證語しやうごす、又一切の女人もし彌陀みやうだうの名願なぐわんによらずは、千劫萬劫恒沙劫をふるとも、つひに女身を轉ずる事を得べからず、まして知るべし、いま道俗ありて女人淨土に生まると事をえずといはゞ、よく忌惡きあくすべし、信すべからず、女性たちよくよく此法を聞きたもち念佛申させ給ふべし、油斷して地獄へおちさせ給ひ候ふな、それ女人の惡名をたて申すにはあらず、又天女成佛てんによじやうぶつ經きやうには女人の方人かたうしをせられて候ふ、天なくして雨ふらず、地なくして草木生ひず、天と地とのめぐみによりて、草木は出生しゆつし候へば、それにたがはず、女人は三千世界の佛の藏くらとこそ説き給ひて候へ、女人なからんにはいかでか佛のたねをばつぐべく候ふ、されば文もんには女人誹謗罪はいらうざい佛誹謗斷はいらうだんとて、女人一人を謗はじつれば、諸佛を謗するとも説けり、たのもしきかなや。又觀無量壽經くわんむりやうじゆに三輩さんはいをわけられたり、上輩の念佛は讀誦大乘解第一義とくじゆだいじよふだいいちぎ如法如説にやほうによせつに、勇猛精進ゆうめくしやうじんにして一日七日一心不亂に申す念佛は、大乘の念佛ときこえて候ふ、中輩の念佛は戒かいを保ち時をして申す念佛にて候ふ、下輩の念佛は阿彌陀佛の仰せに、そもく人となるは種々の不淨をあつめて人とはなれる物なり、身のきたなきこと大海をかたぶけてすゝくと云ふとも、いかでかきよくなるべき、阿彌陀佛の誓ふには不論不淨ふろんふじやう、不論心亂ふろんしんらん、但念佛則得往生ただねんぶつだそくごくわうじやうとの

ゆす一箇子

うそやく一未詳

べ給ふ。されば汗穢不淨あせがじやうをもきはらず、行住座臥時ぎやうぢゆうざがわじ所諸縁しよしよえんとて、ねてもさめても他事なく念佛をだに申せば、三輩中輩をこえて、淨土の往生をとけんこと何のうたがひ候ふべき、又念佛誹謗の者は阿鼻大城あびたいじやうにおちて、長く苦惱をうく、かへすくも諸法を謗することなかれと、迦陵頻の御聲にて、午の時より說法始まりて酉の時まで御說法ある。近きも遠きも御聲の及ばすと云ふ事なし。聽聞の人々も袖をぬらさぬはなかりけり。鐘うち鳴らしゆすよりおりさせ給へば、公卿殿上人輿車こしきるまよりおり、又武士等は狩衣束帶かりぎぬそくたいの袖を合せて、各禮拜らいはいしたてまつる處に、惡僧進み出でて聖人に申すやう、謗法の罪人ざいにんは阿鼻大城あびたいじやうに墮おちて長時ちやうじに苦惱を受くると説き給へるは、いづれの經の文ぞやと問ふ。聖人とりあへず大佛頂經ぶつちやうきやうの文なりと答へ給へば、此僧合掌がつしやうして後生ごしやうたすけ給へと、聖人を禮らいしたてまつれば、粗鼻はぞうそやきてぞ見えたまひける。さて其後あぶらくらに入れ奉り、もてなしたてまつる。御布施には大將殿より御馬六百疋、北の御方よりは長持三百枝えだ、その外大名達御馬十疋二十疋、長持十枝二十枝まゐらせらるれば、いくらといふ數をしらず。されども奈良へみな修理料しゆりれうに參らせられて、聖人の御德分おんとくぶんには一つもめされ給はず。さてしもあるべき御事ならねば、いそぎ大將殿關東へ下向ましくき。祕すべしく。

享錄四年二月二日書寫畢